

『源氏物語』 女からの贈歌考

——六条御息所の歌を例として——

風 岡 む つ み

はじめに

六条御息所は作中で六回光源氏と贈答を交わしている。このうち、四回が六条御息所から光源氏への贈歌である。六条御息所の歌を考えるとき、このように「女からの贈歌」が多いという現象は、従来六条御息所の性格と結びつけられて考えられることが多かったように思われる^①。

女からの贈歌が女側の性格の問題と関わっているという理解は、鈴木一雄氏からはじまる。鈴木氏は『源氏物語』の和歌について、女からの贈歌に関して『和泉式部日記』との比較をした上で、

『源氏物語』でも、やはり女からの贈歌の場合、男からの贈歌という常態とはちがった表現効果をねらったものと考えられるのである。『和泉式部日記』の場合とは異なり、作者の配慮は、そのときの場面・状況の緊張や女の立場の強調だけでなく、

多くの作中女性の性格づけにまで利している面は、やはり無視し得ないだろう^②。

といわれる。そして、藤壺・紫の上、明石の君といった女たちの光源氏への贈歌を分析したのち、

いくらかの例を挙げたに過ぎぬが、くわしく女からの贈歌の場面を検討分析すれば、以上の見通しはほぼ納得されるのであるまいか。女側の性格のうえにもつよくひびく例としては、源典侍や隼月夜内侍、六条御息所、あるいは五節君の積極的な源氏への贈歌がくり返し見られ、同じく女側からの贈歌が目立つ花散里の場合は、そうした色恋の激しさとは逆に、どこか年長者らしいやさしさ、いたわりが感じられる^③。

と結論づけられた。はたして、この理解をもつて『源氏物語』の作中において詠まれ

る女からの贈歌すべてを説明することができらるだろうか。

近年、この女からの贈歌という問題に関しては、高木和子氏が『和泉式部日記』における、和泉式部から宮への贈歌を検討され、

女からの贈歌による贈答歌は、確かに数量からすれば少数ではあるが、それが必ずしもこの二人の関係の危機や女の不安感の表れだとは言いがたい。むしろ男女の贈答のかけあいの様々なバリエーションを披露するために、物語場面設定として、より新鮮な形を模索し続けた結果ではなからうか。^④

と指摘されている。また、高野晴代氏は、『蜻蛉日記』における女からの贈歌の検討をされ、

確かに、女からの贈歌は、男に対する不満や要求を表し、しかも異例の形式であるために、贈る必然を表そうとする姿勢がまず見られよう。その言い訳のような表現の有無が、逆に当該の贈歌の意義を照らし出しているとも言えるのである。また、手すさびではあったが、そこに書かれたことで贈歌となる現象も指摘された。このように、「促された贈歌」という考え方は、自然に贈歌化された和歌の存在を探る視点を提供したと言える。個々の箇所における贈歌の在り方を押さえることは、作者の心の深層を見出す一つの方途となる。^⑤

と指摘されている。

このように、高木・高野両氏が、女からの贈歌という問題を女性側の性格の問題としてだけでなく、物語の方法に関わる問題として検討されていることは重要であろう。

本稿は、六条御息所から光源氏への贈歌を検討することで、『源氏物語』における女からの贈歌のありかたについて考察をするものである。

一

六条御息所と光源氏の最初の贈答は葵巻で交わされる。

うちとけぬ朝ぼらけに出でたまふ御さまのをかしきにもなほ
ふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方に、いとど心
ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、ひとつ方に思しし
ずまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ
尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地した
まふに、御文ばかりぞ暮つ方ある。「日ごろすこしおこたるさ
まなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え
引き避かでなむ」とあるを、例のことつけと見たまふものから
「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづ
からぞうき（六条御息所）

山の井の水もことわりに」とぞある。御手はなほここのらの人の

中にすぐれたりかしと見たまひつつ、いかにぞやもある世かな、心も容貌もとどりに、棄つべくもなく、また思ひ定むべきもなくを苦しう思さる。御返り、いと暗うなりにたれど、「袖のみ濡るるやいかに。深からぬ御言になむ。

浅みにや人は下り立つわが方は身もそばつまで深きこひぢを（光源氏）

おぼろけにてや、この御返りをみづから聞こえさせぬ」などあり。
（②葵・三四～五頁）

光源氏と逢瀬を交わした六条御息所は、かえってそのせいで、「ひとつ方に思ししすまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと」と、正妻という立場にいない自分は、今後光源氏との関係を望む限り、いつとも知れない訪れを待ち続けることになるだろうと思ひ煩うことになる。そんな六条御息所のもとへ届けられたのは、光源氏の情報だけであったというところから、この場面の贈答は始まっている。

光源氏のもとに贈られた六条御息所の「袖ぬるる」歌は、六条御息所が自らを田子にたとえ、恋路の苦しみに袖をぬらさんばかりですと、光源氏に対して自らの思いを訴えるというものである。これに対して光源氏は、「浅みにや」の歌をつけかえしている。この歌意は「身もそばつまで深きこひぢを」という下の句に集約されてい

るだろう。光源氏は、六条御息所が自分の袖は涙に濡れるばかりであると訴えかけたのに対して、自分は全身が浸かっている、つまり自分の方が貴方への思いが深いのだと返しているのである。

ここで注目すべきことは六条御息所が、光源氏の情報にあつた、「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」という言い訳めいた言葉に目をとめ、この光源氏の言葉に対して「袖ぬるる」歌を返したということである。

この六条御息所と光源氏の贈答について、小町谷照彦氏が、

この贈答ほど断絶・落差を感じさせる例は、源氏物語にもあまり見られないのでないだろうか。「恋路」を「泥」に掛けて、泥田の光景に見立てたのが、この贈答の発想であるが、修辭的技巧の絢爛さとは逆に、その内容は深刻である。^⑥

と指摘していることは重要であろう。また、鈴木日出男氏は、六条御息所の歌について、次のように指摘している。

これは源氏の書簡に応じた返事ではあるが、源氏のそれが「御文」ばかりであるところからも、贈答歌のあり方としては、これは異例の女からの贈歌だったことになる。御息所から詠みかけなければ贈答歌の交わされるすべとてない、源氏の気重さ^⑦と御息所の執着がここに読みとられよう。

はたして、鈴木日出男氏が指摘されるように、この六条御息所の歌は「贈答歌のあり方」として「異例の女から贈歌」なのであろうか。

確かに、物語本文には「御文ばかり」であつたとある。だからと云つて消息に光源氏の歌がなかつたとまで言い切つてしまつてよいものだろうか。当時の消息において、歌が書かれていない、ということとは考えにくいだろうし、そもそも光源氏の消息の全文が、物語上に書かれている「日ごろすこしおこたるさまなりつる心地の、にはかにいといたう苦しげにはべるを、え引き避かでなむ」であるとも限らない。

むしろ物語が注意していることは、六条御息所が「例のことつけと見たまふものから」と目にとめた言葉にあるだろう。六条御息所は、光源氏の言葉に触発され、歌をおくつたのである。

六条御息所にとつて、消息にあつただろう光源氏の歌よりも、自ら訪れようともしない光源氏がよこした消息にある「日ごろすこし……」という言い訳めいた言葉の方が目をひいたと捉えるべきだろう。つまり、六条御息所は、光源氏の「日ごろすこし……」という消息の言葉に対して「袖ぬるる」の歌を送り返したのである。

六条御息所の「袖ぬるる」歌のように、男の消息にあつた言葉に対して女が歌を贈つたことによつて交わされる、女から男という形

式の贈答は、勅撰集でいえば、『後撰和歌集』に多くみられる。例えば、次のような贈答がそれにあたる。

平定文がもとより、「難波の方へなむまかる」と言ひ送
りて侍ければ、
土佐

浦わかずみるめ刈るてふ海人の身は何か難波の方へしも行く
返し
平定文

君を思深さくらべに津の国の堀江見にゆく我にやあらぬ

(巻九・恋一・五五三、五五四)

源さねあきら「たのむことなくは死ぬべし」と言へりけれ
ば、
中務

いたづらにたび／＼死ぬと言ふれば逢ふには何をかへむとす
らん
返し

源信明

死ぬ／＼と聞く／＼だにも逢ひ見ねば命は何時の世にが残さむ

(巻二一・恋三・七〇七、七〇八)

右の二つの贈答は、それぞれ、詞書に男が女に対して贈つた消息の文面が示され、女の歌は男の言葉を取り込みながら、歌をもつて返したととれる。

もちろん、これらの贈答は『後撰和歌集』の撰者たちが、男側の消息にあつた歌を意図的に切り取つたものとも考えられる。あるいは

は、詞書として書かれている男の言葉が、男の消息にあった内容を要約したものなのかもしれない。

しかしながら、これらの『後撰和歌集』にある女からの贈歌は、勅撰集の撰者が男の消息の言葉に対して、女が歌を返すという形式として理解しているということを示している。

また、このような贈答の形式は、『後撰和歌集』だけでなく、他の物語にも存在している。例えば『伊勢物語』の七五段では、

むかし、男、「伊勢の国に率ていきてあらむ」といひければ、
女、

大淀の浜に生ふてふみるからに心はなぎぬかたらはねども
といひて、ましてつれなかりければ、男、

袖ぬれてあまの刈りほすわたつうみのみるをあふにてやま
むとやする

女、

岩間より生ふるみるめしつれなくはしほ干しほ満ちかひも
ありなむ

また、男、

なみだにぞぬれつつしほる世の人のつらき心は袖のしづく
か

世にあふことかたき女になむ。

と、女は男の「伊勢の国に率ていきてあらむ」という言葉に対して、「大淀の」という歌で応えている。

同様に、『大和物語』の第六七段では、

また、としこ、雨の降りける夜、千兼を待ちけり。雨にやさ
はりけむ、来ざりけり。こぼれたる家にて、いといたくもりけ
り。「雨のいたく降りしかば、えまぬらずなりにき。さるとこ
ろにいかにものしたまへる」といへりければ、としこ、

君を思ふひまなき宿と思へども今宵は雨はもらぬ間ぞなき
と、男の寄こした消息に対して、女が歌を送り返しているという用
例が確認できる。

もちろん『後撰和歌集』や『伊勢物語』『大和物語』における、
このような女からの贈歌には、女側の嫉妬や恋愛関係における不安
といったものを読みとることができるだろう。六条御息所の「袖ぬ
るる」歌も、自分のもとへと訪れようとしないう光源氏への悲しみや
その奥底には葵上への嫉妬があるのかもしれない。

しかし、六条御息所は決して、自ら進んで光源氏に対して歌を贈
るようなことはしていない。あくまでも、光源氏の情報というきつ
かけがあるからこそ、六条御息所はそれに対して歌を送り返してい
るのである。

また、六条御息所の贈歌が葵卷の歌「袖ぬるる」のように、光源氏側から送られた消息をきっかけにしているという点で、須磨巻で行われる次の贈答も同様である。

まことや、騒がしかりしほどの紛れに漏らしてけり。かの伊勢の宮へも御使ありけり。かれよりもふりはへたづね参れり。

浅からぬことども書きたまへり。言の葉、筆つかひなどは、人よりことになまめかしくいたり深う見えたり。「なほ現とは思ひたまへられぬ御住まひをうけたまはるも、明けぬ夜の心まどひかとなん。さりとも、年月は隔てたまはじと思ひやり聞こえさせむこともはるかなるべけれ。

うきめ刈る伊勢をの海人を思ひやれもしはたるてふ須磨の浦にて（六条御息所）

よろづに思ひたまへ乱るる世のありさまも、なほいかにつべきにか」と多かり。

伊勢島や潮干の渦にあさりてもいふかひなきはわが身なりけり（六条御息所）

ものをあはれと思しけるままに、うち置き書きたまへる、白き唐の紙四五枚ばかりを巻きつづけて、墨つきなど見どころあり。

(略)

御返り書きたまふ。言の葉思ひやるべし。「かく世を離るべき身と思ひたまへましかば、おなじくは慕ひきこえましものなどなむ。つれづれと心細きままに、

伊勢人の波の上こぐ小舟にもうきめは刈らで乗らましものを（光源氏）

海人がつむ嘆きの中にしほたれていつまで須磨の浦にながめむ（光源氏）

聞こえさせむことの何時ともはべらぬことぞ、尽きせぬ心地してはべれ」などぞありける。かやうに、いづこにもおぼつかないからず聞こえかはしたまふ。 (②須磨・一九三―六頁)

この六条御息所の二首の歌は、『新日本古典文学全集』『源氏物語作中和歌一覽』が、光源氏に対する六条御息所の「贈歌」として分類しているものである。^⑧

しかしながら、本文中には「かの伊勢の宮へも御使ありけり」と光源氏が伊勢に使いを送ったことが書かれており、また、高木和子氏は、

光源氏は、御息所からの使いの者にまで親しみを覚えて二、三日逗留させたとあり、光源氏の返歌も御息所の贈歌に応じて二首ある (②一九三―六頁)。この場合、先の葵卷の例 (②三四―五頁) とは異なり、光源氏がわざわざ御息所に使いを遣わ

実際に和歌を持たせなかつたとは考えられず、物語は意図的に光源氏の贈歌を叙述せず、御息所→光源氏へ、という贈答の形を取って叙述したと考えられる。^⑨

と説かれている。高木氏が指摘されるように、届けられた消息には光源氏の歌があつたと考えられる。

ここで、『源氏物語』が伊勢へと送つた光源氏の内容を物語上に書かないのは、あくまでも、六条御息所からも光源氏へ使者が送られてきたということを書くことで、光源氏と六条御息所の交流が完全に途絶えてしまつたわけではないことを示すためだろう。

また、この須磨巻の贈答は、六条御息所と光源氏が物語上で交わす最後の贈答であり、六条御息所にとって物語の中で、最後の詠歌になるものである。

今、くわしく贈答の内容まで踏み込むことはしないが、六条御息所の歌二首と、それに対する光源氏の歌二首が歌語や内容の面に対しており、そこにすれ違いはみられない。

このような男側の消息の内容が書かれない女の歌もまた、『後撰和歌集』にみられる。

男の、こ、かしこに通ひ住む所多くて、常にしもとはざりければ、女も又色このみなる名立ちけるを、うらみ侍ける返事に
源たのむがむすめ

つらし頼いかゞ怨む郭公わがやど近く鳴く声はせで

(巻九・恋一・五四七)

男の返事につかはしける

俊子

思ふてふ事の葉いかなつかな後うき物と思はずも哉

(巻二三・恋五・九一九)

この二つの女の歌において、詞書は男の消息本文を示していない。しかしながら、その詞書からは、女が男に対する返事として歌を贈つたということはわかる。前節では、『後撰和歌集』において、女の歌の詞書に男の消息本文が示される贈答を確認したが、これらの歌もまた、男側の消息に対する返事としての女の歌という形式と捉えて考えることができるだろう。

『源氏物語』にもどしてみると、本稿で考察の対象とした六条御息所の女からの贈歌である葵巻の場合も、この須磨巻の場合も、六条御息所の歌が送られる前には、光源氏側の消息というきっかけがある。つまり六条御息所の贈歌は、男側のきっかけに応じたものである。

三

また、六条御息所の「女から」の贈歌が、光源氏側の用意したきつかけに触発されているものであるということは、次のような二人

の贈答からも分かる。

「こなたは、實子ばかりのゆるされははべりや」とて、上り
めたまへり。はなやかにさし出てたる夕月夜に、うちふるまひ
たまへるさまにほひ似るものなくめでたし。月ごろの積もりを、
つきづきしう聞こえたまはむもまばゆきほどになりければ、
櫛をいささか折りて持たまへりけるをさし入れて、(光源氏)

「変らぬ色をしるべにこそ、齋垣も越えはべりにけれ。さも心
憂く」と聞こえたまへば、

神垣はしるしの杉もなきものをいかにまがへて折れるさか

きぞ(六条御息所)

と聞こえたまへば、

少女子があたりと思へば櫛葉の香をなつかしみとめてこそ

折れ(光源氏)

おほかたのけはひわづらはしけれど、御簾ばかりはひき着て、
長押におしかかりてゐたまへり。(②賢木・八七〇八頁)

ここで注目したいのは、六条御息所の贈歌が、葵巻の「袖ぬる
る」歌の場合と同様に、光源氏の「変はらぬ色をしるべにこそ、齋
垣も越えはべりにけれ。さも心憂く」という言葉をきっかけとして
いるということである。

この光源氏の言葉には、「ちはやぶる神垣山の櫛葉は時雨に色も

変わらざりけり」(『後撰和歌集』巻第八、冬、四五八、よみ人しら
ず)、「ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし大宮人の見まほしくさに」
(『伊勢物語』七一段)や「ちはやぶる神の齋垣も越えぬべし今はわ
が名の惜しけくもなし」(『拾遺和歌集』巻第七、恋四、九二四、柿
本人麻呂)などの古歌が引かれていとされる¹⁰⁾。これらの古歌をも
つて、光源氏は、直接自分と会おうとしない六条御息所に対して、
会ってほしいと訴えかけているのである。対する六条御息所は、光
源氏が古歌を用いて問いかけてきたことに対して、その歌意を汲ん
だ上で「神垣は」の歌を返していることは、その内容や使われてい
る言葉からも明らかである。

ところで、男が女に対して言いかけた言葉に対して女が歌で答え
ている例は歌物語にもみられる。例えば、『伊勢物語』第二四段で
は、

むかし、かたみなかにすみけり。男、宮仕へしにとて、別れ
惜しみてゆきにけるまに、三年来ざりければ、待ちわびたり
けるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」とちぎ
りたるけるに、この男来たりけり。「この戸あけたまへ」とた
たきけれど、あけで、歌をなむよみていだしたりける。

あらたまのとしの三年を待ちわびてただ今宵こそ新枕すれ
といひだしたりければ、

あづさ弓ま弓つき弓年を経てわがせしがごとうるはしみせ

聞け

よ

とよみたりければ、かぎりなくめでて、この今の妻をば送りて、

といひて、いなむとしければ、女、

もとのごとなむすみわたりける。

あづさ弓引けど引かねどむかしより心は君によりにしもの
を

といひけれど、男かへりにけり。

というように、男の「さて、それをばいかが聞きたまふ」（鹿の鳴く声をどのように聞いたのか）という問いかけに対して、妻が「われもしか」の歌をもつて答えているという形式がみられる。

というように、「この戸をあけたまへ」という男の要求に対して、女が、「あらたまの」の歌を返すことで、「今ほかの男と新枕をかわすところなのであけることができない」と答えている。

また、『大和物語』第一五八段に、

大和の国に、男女ありけり、年月のかぎりなく思ひてすみけ

賢木卷では、光源氏の問いかけに対して六条御息所の「神垣は」という歌をもつて答えたことで、二人の関係が復活するという構成になっている。長らく逢瀬が途絶えていた女のもとへ男が消息を送り、それに対して女が歌を返すという例がすでにみられることは、「袖ぬるる」歌の際に確認した通りである。

るを、いかがしけむ、女をえてけり。なほもあらず、この家に
率て来て、壁をへだててすゑて、わが方にはさらに寄り来ず。

『源氏物語』においては、光源氏が問いかけの言葉として、古歌を用いているという点に特色がある。これは、古歌を用いることで

いと愛しと思へど、さらにいひもねたまず。秋の夜の長きに、
目をさましてきけば、鹿なむ鳴きける。ものもいはで聞きけり。

光源氏は、六条御息所から何かしらの反応があることを期待したとみてよいだろう。そして、六条御息所が古歌を正確に読みとり、歌を返したところに、六条御息所の教養の高さも示されることになっ

壁をへだてたる男、「聞きたまふや、西こそ」といひければ、
「なに」といひらへければ、「この鹿の鳴くは聞きたうぶや」

ている。

といひければ、「さ聞きはべり」といひらへけり。男、「さて、そ
れをばいかが聞きたまふ」といひらへけり。

四

われもしかなきてぞ人に恋ひられし今こそよそに声をのみ

ここまでみてきた六条御息所と光源氏の贈答では、六条御息所は

光源氏の消息や言葉といった直接的な接触をきっかけとして歌を返している。それは「女からの贈歌」とみえても、男側の働きかけに對して答えるという受け身の姿勢を保っているのである。

六条御息所が、自ら積極的に光源氏に対して自らの思慕を訴える歌を送ることはしていないということは次の贈答からもわかる。それは、葵巻で、葵上を亡くした光源氏におくられた六条御息所の弔問歌である。

深き秋のあはれまさりゆく風の音身にしみけるかな、となら
はぬ御独り寝に、明かしかねたまへる朝ぼらけの霧りわたれる
に、菊のけしきばめる枝に、濃き青鈍の紙なる文つけて、さし
置きて往にけり。いまめかしうも、とて見たまへば、御息所の
御手なり。「聞こえぬほどは思し知るらむや

人の世をあはれと聞くも露けきにおくるる袖を思ひこそや
れ（六条御息所）

ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」とあり。常よりも優にも書いたまへるかな、とさすがに置きがたう見たまふものから、つれなの御とぶらひやと心憂し。(略) 斎宮の御浄まはりもわづらはしくやなど、久しう思ひわづらひたまへど、わざとある御返りなくは情けなくやとて、紫の鈍める紙に、「こよなうほど経はべりにけるを、思ひたまへ怠らずながら、つつましきほ

どは、さらば思し知るらむとてなむ。

とまる身も消えしも同じ露の世に心おくらむほどぞはかな

き（光源氏）

かつは思し消ちてよかし。御覽ぜずもやとて、これにも」と聞こえたまへり。

里におはするほどなりければ、忍びて見たまひて、ほのめかしたまへる気色を心の鬼にしるく見たまひて、さればよと思すもいといみじ。
(②葵・五一―三頁)

この贈答について、鈴木日出男氏は次のように指摘されている。

御息所からの贈歌は、「青鈍」の料紙からも明らかのように、弔問の意図を前面におし出している。――中略――この歌は、葵の上の死を悼み、その夫である源氏に同情する趣ではあるものの、歌の言葉としては葵の上その人は具体的に表現されず、そのかわり人生無常の思いがきわめて一般化抽象化された表現となっている。この歌じたい、あえて異例の贈歌を詠もうとするために、弔問の歌という形式に強く依拠しながら、しかも人間関係の詳細さを極力捨象しているのである。^①

鈴木氏が指摘されるように、六条御息所の「人の世を」歌は、六条御息所が葵上を失った光源氏への弔問にかこつけて贈った歌であろう。それは、光源氏が、

かの御息所は、齋宮は左衛門の府に入りたまひにければ、いとどいつきし御浄まはりにことつけて聞こえも通ひたまはず。

(②葵・五〇頁)

と、御息所が娘の齋宮に付き従つて潔齋をしていることにかこつけて、消息すら送っていないかつたということとも関係していよう。おそらく光源氏からの消息を待ちわびていただろう六条御息所にとつて、光源氏に対して何かしらの行動をとれるのは、弔問歌を送ることしかなかつたのである。

しかし、この六条御息所の歌について「あえて異例の贈歌を詠もうとするために、弔問の歌という形式に強く依拠しながら、しかも人間関係の詳細さを極力捨象している」といつてしまつてよいだろうか。そもそも、この六条御息所の「人の世を」歌は、弔問歌としてみた時に、異例のものなのだろうか。

試みに、三代集の哀傷に採られている弔問歌をみると、以上のようになる。

藤原敏行朝臣の、身まかりにける時に、よみてかの家に遣はしける
紀友則

寝てもみゆ寝でも見えけり大方はうつせみの世ぞ夢にはありける
〔古今和歌集〕卷一六・哀傷歌・八三三

藤原忠房が、昔あひ知りて侍ける人の、身まかりにける時

『源氏物語』女からの贈歌考

に、弔問に遣はずとて、よめる

閑院

さきだ、ぬ悔ひの八千たびかなしきはながる、水の帰りこぬ也

〔古今和歌集〕卷一六・哀傷歌・八三七

喪に侍ける人を、弔問にまかりて、よめる 壬生忠岑

墨染のきみが袂は雲なれやたえず涙の雨とのみふる

〔古今和歌集〕卷一六・哀傷歌・八四三

女四の親王の事、とぶらひ侍て

伊勢

こ、ら世をきくが中にも悲しきは人の涙も尺きやしぬらん

返し

よみ人しらず

聞人もあはれてふなる別にはいと、涙ぞ尽きせざりける

〔後撰和歌集〕卷二〇・哀傷・二三九四、一三九五

なくなりける人の家にまかりて、帰りにての朝に、かしこ

なる人につかはしける

伊勢

なき人の影だに見えぬ遣水の底は涙に流してぞ来し

〔後撰和歌集〕卷二〇・哀傷・一四〇二

清正が枇杷大臣の忌に籠りて侍けるにつかはしける

藤原守文

世中のかなしき事を菊の上に置く白露ぞ涙なりける

返し

藤原清正

きくにだにつゆけかるらん人の世を目に見し袖や思やらなん

三七

〔後撰和歌集〕卷二〇・哀傷・一四〇九、一四一〇

順が子亡くなりて侍ける頃、とひに遣はしける

清原元輔

思やる子恋の森の雫にはよそなる人の袖も濡れけり

〔拾遺和歌集〕卷二〇・哀傷・一三〇三

三代集の用例をみると、弔問歌は必ずしも人間関係を詳細に

詠まなければならないものであるとはいえない。むしろ、その中心は遺族の悲しみを慮ることにあるということがわかる。そのことからすれば六条御息所の「人の世を」歌は、弔問歌として類型的なものである。少なくとも、歌自体は、光源氏の悲しみを慮るものになっており、何か特別な六条御息所自身の思いが詠みこまれているようにはみえない。

しかしながら、この歌の前後の「聞こえぬほどは思し知るらむや」「ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」という言葉は、光源氏の情報もしくは訪れを待ちわびていた自分自身の気持ちを訴えかけるものととれ、そこには確かに六条御息所自身の思いが語られているといえる。この歌を見た光源氏が「つれなの御とぶらひや」と思ったのは、六条御息所の歌が、弔問歌として無難なものであっただけでなく、歌の前後に書かれた「聞こえぬほどは思し知るらむや」と「ただ今の空に思ひたまへあまりてなむ」にこそ隠された六

条御息所の本心があるということを見抜いたからだろう。

この葵巻の六条御息所の「人の世を」歌は、あくまでも光源氏に対する弔問という体裁を保っている。それは、社会的習慣に基づく行為として位置づけられるのである。

まとめにかえて

本稿では、六条御息所からの贈歌がきっかけとなるとみえる、光源氏との贈答をみて来た。これらの六条御息所の贈歌は次のように分類することができるだろう。

1 光源側の消息や言葉といった働きかけが六条御息所の贈歌のきっかけとなっている場合：葵巻の「袖ぬるる」歌、賢木巻の「神垣は」、須磨巻の「うきめ刈る」「伊勢島や」歌。

2 社会的慣習をもって光源氏に対して六条御息所が歌を贈っている場合：葵巻の「人の世を」歌。

つまり、六条御息所は決して自ら進んで光源氏に対して歌を贈るようなことはしていないのである。逆にいえば、光源氏の情報やあるいは弔問歌を送るというきっかけがなくては、彼女は歌を贈ることができないのである。そしてその内容も、男の懸想を疑い、いったんは反発してみせるといういわゆる女歌の詠み方や、弔問歌という伝統な詠み方に則っている。

また、このような男の言葉をきっかけとして女からの歌が詠まれるという贈答の形式は、『後撰和歌集』や『伊勢物語』『大和物語』にもみられることから、『源氏物語』に特有のものではないということがいえる。

『源氏物語』における女からの贈歌を考えるとき、「女からの贈歌」を異例のものとしてひとくくりにして考えるのではなく、物語における女の贈歌が、何をきっかけにして詠まれているのかということを変更して考えてみるべきではないだろうか。なぜならば、『源氏物語』における女からの贈歌の用例を検討していくと、一概に女が自ら男に詠みかけるものばかりではないということがうかがえるからである。本稿はその対象として六条御息所の光源氏への贈歌を選び、考察を試みたものである。

注

- ① 六条御息所の和歌についての先行研究は、小町谷照彦「光源氏のすきとうた」(『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会、一九八四年)、武者小路辰子「六条御息所——その声から——」(森一郎編『源氏物語作中人物論集』勉誠社、一九九三年)、高田祐彦「道綱母から六条御息所へ」(『国語と国文学』第七五卷一、一九九八年一月)、鈴木日出男「愛執の歌——六条御息所と光源氏——」(『成蹊大学文学部紀要』第三五号、二〇〇〇年三月)、高木和子「花散里・朝顔の姫君・六条御

息所の物語と和歌」(『源氏物語の歌と人物』翰林書房、二〇〇九年)など多くがある。

- ② 鈴木一雄「源氏物語の和歌」『国文学』第一三卷第六号、学燈社、一九六八年五月。
 - ③ ②に同じ。
 - ④ 高木和子「女から詠む歌 源氏物語の贈答歌」青簡舎、二〇〇八年、八七頁。
 - ⑤ 高野晴代「蜻蛉日記」女から贈る歌——『源氏物語』への階梯——『王朝女流日記を考える——追憶の風景』武蔵野書院、二〇一一年。
 - ⑥ 小町谷照彦「源氏物語の歌ことば表現」東京大学出版会、一九八四年、一三一頁。
 - ⑦ 鈴木日出男「源氏物語虚構論」東京大学出版会、二〇〇三年、三七五頁。
 - ⑧ 阿部秋生ほか校注『新編日本古典文学全集 源氏物語⑥』小学館、一九九八年、六一三頁。
 - ⑨ 高木和子「手紙から読む源氏物語」『古代中世文学論考 第二一集』新泉社、二〇〇四年。
 - ⑩ 『新編日本古典文学全集 源氏物語②』小学館、一九九五年、八七頁、頭注二、一三三。
 - ⑪ ⑦同書、三八三〜四頁。
 - ⑫ 鈴木日出男「古代和歌の世界」筑摩書房、一九九九年。
- 〔附記〕本稿で使用した『源氏物語』『伊勢物語』『大和物語』の本文には『新編日本古典文学全集』を用いた。引用の際には『源氏物語』は巻数・巻名・頁数を文末に示した。また、()内の人物名は発話者かあるいは歌の詠者を示す。『古今和歌集』『後撰和歌集』『拾遺

『源氏物語』女からの贈歌考

和歌集』の本文はいずれも『新日本古典文学大系』を使用した。引用論文や『源氏物語』本文中の——は稿者が私的に附したものである。